

Medicine 医学を変えた 70 の発見

William Bynum, Helen Bynum 編 鈴木晃仁, 鈴木実佳 訳

テレビ・シリーズの『大草原の小さな家』に、たしかこんなシーンがあった。ローラが学校から家に帰ってくると、姉のメアリーが本を読んでいる。ローラが「何、読んでるの?」と尋ね、メアリーが「歴史の本よ」と答えると、ローラは次のように言って、そそくさと外に遊びに行ってしまう。「そんな死んだ人たちの話なんか読んで、何が面白いの。ぞっとしちゃう」。

勉強しないで遊びに行くことを正当化するために、たぶんローラはそう言ったのだが、ローラのこの言葉はなかなか本質をついている。人間は今を大切に生きるべきであって、その今を昔のために費やすことに一体、何の意味があるのか。ローラに歴史の本を読ませるのは大変だ。今の自分につながる歴史の本でなければ、ローラは決して読んでくれないだろう。

本書は医学の歴史に関する本である。ローラはこの本を読んでくれるだろうか。絶対に読んでくれると私は思う。それもきっとワクワクしながら。医療の歴史社会学というものを手がけてきたので、私も医学史の本はいくつか読んできたが、それらの多くは年代順に、誰がいつ何を発見したという具合に進む。多分、ローラなら途中で投げ出すだろう。しかし、本書は違う。医学が人の身体をどうとらえてきたか (第1章)、病気にどう向き合ってきたか (第2章)、どんな道具を用いてきたか (第3章)、どんな病気とどういうふうに関わってきたか (第4章)、どんな薬がつくられてきたか (第5章)、どんな手術法がどうやって生み出されたか (第6章) といったことが、年代順ではなく、テーマ別にかかれている。まずは医学について自分が

知っていることを手がかりに、どこからでも読み始められる形になっている。ローラもこれなら手に取ってくれるはずだ。

本書のもう一つの魅力は、豊富なカラー図版である。「一体、これは何の絵だろう」とまずは図版に目を通してながら、その後、本文を解説として読むという読み方もできる。この女の子は、なぜ左の写真ではこんなにやせているのに、右の写真ではローラみたいに健康なのか (本書 270 ページ)。それはインスリンという薬を投与されたから。なぜその薬が必要だったのか。糖尿病という病気にかかっていたから。じゃあ、糖尿病って何? 本書をそのように読み進めていくのも一案だろう。

そのインスリンについて、本書は「善にも悪にも使える力をもった物質」と記し、1 型糖尿病で 1920 年代にインスリンを投与された若者たちがその後、失明したり、腎臓障害になったことを「不愉快であるが認めなければならない真実」と伝えている。理由は全く違うが、姉のメアリーが後に失明するローラにとって、これは人ごとではないはずだ。本書の第三の特徴は、医学の歴史のそうした影の部分にもちゃんと光を当てていることである。私たちはそういった事実も本書から一つ一つ学びながら、今の医学を理解すべきだろう。

東大大学院教授・社会学 市野川容孝

A4 変 頁 304 2012 年

定価 4,200 円 (本体 4,000 円 + 税 5%)

[ISBN978-4-260-01518-9] 医学書院刊